



m Wasserlein Lockwitz im Vogtlande, auf der thüringischen Grenze, ist

誘拐^{かどわかし}
——
ある逸話

ヨーハン・カール・アウグスト・ムゼーウス著

鈴木満訳・注・解題

テューリンゲンの境にあるフォークトラントの小さな湖ロックヴィッツの畔⁽²⁾にラウエンシュタイン(1)城があった。これはかつて女子修道院で、フス派戦争で破壊された。聖なる領地は放棄された財産としてその後再び世俗の手に渡り、当時領主だったオルラムウンダ伯爵⁽⁴⁾から、ある封臣に預けられた。で、こちらは修道院の廢墟に城を建て、正当に得たこの財産に自分の名を付けたか、あるいは城から自分の名を得たかしたのである。彼の名乗りはラウエンブルクの郷士⁽⁵⁾であった。けれどもほんの間もなく、聖界の所領は俗人の不浄な手の中では繁榮しないこと、かかるひそやかな聖物略取は何かしらの方法で罰せられること

が明らかになった。

もう数世紀にも亘って暗黒の地下納骨堂で静寂な平穩の裡に安らっていた尊敬すべき修道女たちの遺骨は、その神聖さに加えられた冒瀆行為をあつさり我慢することはできなかつた。死人の朽ちた骨は生氣を取り戻し、夜更けともなると地の底からがたがたから音が立てて上がつて来て、まだ壊されずに残っていた回廊で恐ろしい物音を響かせた。修道女たちの行列が厳かな壮麗さで城の中庭を練り歩くこともしばしば。彼女たちは部屋部屋をうろつき回り扉を開けたり閉めたりして、ここを我が家としている所有者を不安に陥れ、眠りの邪魔をするのだった。奉公人部屋とか厩とかで騒ぎ、下女たちを怖がらせ、あちらこちらで抓つたりつまんだり、家畜を苛めることも少なくない。牝牛らは乳を漉らし、馬どもは鼻風を吹き、棹立ちになり、馬房の隔て板を打ち壊す始末。

敬虔な尼僧方のこうした乱暴狼藉とひっきりなしの呵責に遭つて、人間も動物もいじけてしまい、すっかり意氣阻喪した。上は郷士殿から、下は怒りん坊の吠え咬み屋「わん公」に至るまで。領主は費用を惜しまず、極めて名高い幽霊祓い師を頼んで、この騒騒しい同居人に安息を命じ、永遠の沈黙を課せうとした。けれど、悪魔の全王国すらそれをやられては震え上がる最も強力な呪文も、普通なら、家蠅に対する蠅叩きのごとく、悪霊どもを退治してくれるお聖水に浸した灌水器も、かつて自分たちが所有していた地所に対する権利を断固として守り抜く幽霊女人軍の頑強さには長いこと何の効果も無かつた。そこで祓魔師たちはたびたび聖遺物といった厳かな道具一式もろとも逃げ出して、敗退せざるを得なかつたわけ。

その世紀のガスナーのような男で、国中を遍歴し、魔女を探知し、コーボルトを捉え、悪霊に憑かれた人から悪霊の卵を取り除くのを業としていた御仁がやつとこさ、夜浮かれ騒ぐ女幽霊たちに最終的に言うことを聞かせ、彼女らを再び暗い納骨堂に封じ込めるのに成功した。そこでなら好きなだけ、髑髏をあちこち転がしたり、骨をがらがら

たかた鳴らすことを許された。さてこれで城中は何もかも平穩になり、尼僧たちは再び静かな死の眠りについてたのである。しかし七年後、一人の落ち着きのない修道女の幽霊がまたしても眠りから覚め、夜更けに姿を現し、暫くの間以前の遊びをやった。くたびれると、七年休息し、それからまた上の世界を訪問、城を点検するのだった。時とともに城の所有者たちは幽霊の出現に慣れてしまい、尼僧が姿を現す周期になると、雇い人たちは宵には回廊に足を踏み入れないう、あるいは、部屋から外へ出ないう用心した。

初代の所有者が死去すると、封土は彼の法に適った結婚から齎された後裔に受け継がれた。以来決して男系の嫡子が絶えることは無かったが、三十年戦争の時代に至ると、それがラウエンシュタイン一族の末裔の栄華の最後で、自然はこの家系を存続させる精力を使い果たしたかのようになって思われた。自然はこの末裔の体を作り上げるのに材料を空前良く浪費し過ぎたので、この御仁が完全に膨張しきった時、郷土殿の体重はほとんど有名な太っちょ、プレスブルクのフランツ・フィナツィ(2)の重さに達し、その肥満度はパウル・ブッタープロートという名の大変なでぶちんのホルシュタイン人よりほんの数ツオル少ないだけだった。ブッタープロートは最近パリのご婦人がたの観覧に供されたが、彼女たちは彼の丸丸とした腿と腕に触って至極ご満悦だった。とは申せ、郷土ジークムントは、南瓜時代以前には全く立派な男で、儉約な父祖から受け継いだ遺産を減らしはしなかったが、人生を楽しく享樂するのにも使ったのである。彼は、先代が身を引き、ラウエンシュタインを自分に譲り渡すとすぐさま、その祖先全ての例に倣って結婚し、名門の血統存続を大真面目に考慮、幸い奥方との間に婚姻の果実の初生りを得ることができた。が、子どもは器量の良い女兒。そしてこれをもって繁殖は打ち切りとあいなった。優しい妻のあまりにも面倒見の良い世話は栄養の行き届いた旦那様に向けられたので、跡継ぎの子宝が欲しい、という希望はことごとくでっぴりした脂肪に化けてしまった。結婚当初から独り家政の実権を握っていた家庭的な母親は、息女の教育も一手に引き受けた。太



鼓腹になればなるほどますます精神が不活発になって来たパパは、煮たり焼いたりした物以外世の中の事にもはや関心を示さなかったのね。

令嬢エミーリエは、家事がいろいろ忙しく執り行われている時、大体は母なる自然のまめやかな世話に任されたが、それで別段具合が悪かったわけではない。自分の評判を危険に曝すのを好まず、過ちを犯すと何か傑作を作ってその埋め合わせにするのが通例のこのひそやかな芸術家は、体重と精神の才能を、息女の場合は、父親よりもっと正しい比率に適合させた。つまり彼女の方は美しく、そして聡明だったのである。若い令嬢が、体重も魅力も花開き始めると、消え失せつつある血統の栄光をこの子によってまだまだ立派に高めよう、という母親の意向はどんどん強まった。このご婦人、家系図を厳粛に尊重し、これをこの家の最も大事な飾りと思ってい

る点を除いては、普段の生活ぶりからはちよつとそれとは見て取れない、ひそかな誇りを抱いていた。ラウエンシュタイン一族の最後の花を移植し

たい、と願っている血統としては、ロイス家の公達（五）ほど彼女にとって充分古く高貴なものは、全フオークトラントには無かったのである。そこで近隣の若殿輩（六）が、この素晴らしい獲物をさっと掠め取りたい、といくら心掛けても、狡猾い母親はこうした意図を巧妙に挫折させるすべを心得ていた。彼女は、税関吏が都市の門の遮断棒を監視するように娘の心を注意深く見張っていたので、密輸入品が忍び込むことは無かったし、媒酌をもくろむ善意の従姉連やら伯母御たちの思惑取り引きを全てご辞退申し上げ、息女とともにいとも高貴にふるまったので、郷士（七）などが敢えて近づ

くことなどできなかつた。

乙女心が教えに従っている限りは、鏡のような湖面に浮かび、舵が導くままに操られる小舟に譬えられる。でも風が吹き起こり、波浪がこの軽い乗り物を揺さぶると、もう舵の言うことを聞かなくなり、波浪の弄ぶまま。おとなしいエミリーエは母親のあんよはお上手を習う紐にすぎり、喜んで誇りの道を導かれて行った。まだだれのものでもない心はどんな刷り込みも可能だったのである。彼女は自分のさまざまな魅力に臣従する公爵か伯爵を期待して、それより低い生まれの親衛騎士が慰懃を通じようとしても、冷淡にふんとして撥ね付けるのだった。けれどもラウエンシュタインの典雅の女神に求愛する身分に相応しい男性が現れないうちに、母親の結婚計画を著しく狂わせ、ドイツ民族の神聖ローマ帝国の全ての公爵、全ての伯爵が姫に求婚するには遅すぎる、という原因となる事態が起こった。

三十年戦争の騒乱の際、勇敢なヴァレンシュタインの軍勢がフォークトラントの諸地方に冬営を設けたことがある。郷土ジークムントは、昔の夜彷徨い歩く女幽霊たちにも増して乱暴狼藉を働く、数多くの招かれざる客人らを城中に迎える羽目になった。この連中、幽霊たちに較べれば所有権はさほど主張しなかつたが、悪霊祓い師に追っ払われるような代物では無かつた。領主一家は、こうした所業に対し愛想良くふるまわざるを得なかつたし、居丈高な殿方輩のご機嫌を取り結ぶために、たつぷりご馳走を供したものを。饗宴と舞踏会はとつかえひつかえしよつちゅう。前者で采配を振るうのはこの家の奥方で、後者では息女。客人権をこうまで気前良く重んじてやったので、粗野な軍人たちも大層如才がなくなり、かくも豊かにもてなしてくれるこの家を尊敬、主人側と客たちは和氣謙譲だった。これらの軍神たちの中には、足萎えの鍛冶の神の艶っぽい伴侶を誘惑できそうな若い英雄も少なくなかつたが、一人として彼女の淑徳を曇らせた者は無かつた。

男前のフリッツと呼ばれている一人の将校は胃を被つた愛の神様とでも言うべき風采だったが、めでたき教養と好

ましい行状とを結び付けており、穏やかで、謙虚で、感じが好く、その上活発な精神の持ち主で、輝かしい踊り手だった。エミリーエの心に感銘を与えた男性はこれまで皆無だったが、彼だけが彼女の純潔な胸の裡に経験したことのない感覚を呼び起こし、言葉では言い表せない快さでその魂を満たしたのだった。乙女にとって不思議なのはただ一つ、この魅惑の美青年が男前の伯爵、あるいは、男前の公爵ではなく、ただ単に男前のフリッツと呼ばれるだけの存在であること。彼女は折があると、いくらか親密になった彼の戦友のだれかれに、かの青年の氏素性を質した。しかしこれについていくらかでも照明を当ててくれる者はいない。だれもが男前のフリッツを、勤務に精通して、この上もなく好ましい性格の勇敢な男だ、と賞賛。それなのに彼の家系図となるとなんとあやふやで、さまざまの異説が唱えられる始末。これは丁度、有名だけれども、にも関わらず謎めいているカリオストロ伯爵——マルタ騎士団のある総帥の子孫で、母系ではトルコ大帝の甥なのだ、とか、ナポリの御者の小倅だ、とか、ロシア皇太子の実の弟だ、とか、アルバニア公と称している、とか、また、その表向きの職業に関しては、奇跡を行う人なのだ、とか、**變作りだ、とか諸説紛紛**——の本来の素性と身分に関してと同様。全ての証言が一致しているのは、男前のフリッツは卒伍から身を起こして騎兵中隊長にまでなったのであり、更に幸運に恵まれば、急速に出世して軍の極めて光輝ある地位にすら立身するだろう、ということ。

知りたがり屋さんのエミリーエがこっそり訊き回ったことはフリッツに内緒のままではいなかった。友だち連中はこの警報を彼に注進しようと思ひ、いろいろご親切な推測をくつつけた。彼の方は謙遜な性格だから、彼らの申し立てを**擲諭**、冗談だ、と解釈した。しかしながら、令嬢が自分のことを問ひ合わせた、と聞いて心中嬉しかったのである。なぜなら令嬢を一目見た途端、恍惚とした昂揚感に襲われたのだが、この気持ちは、恋の先駆なのが普通。

甘美な共感ほど活力を持ち、同時に明瞭で確固とした特殊語法はまたとない。そしてこの効能によって初対面から

恋まで、一兵卒から士官まで出世するより通常遙かに速く進展が行われるのである。なるほど口での愛の告白まではそう急には。けれども双方が考えを伝え合うことができ、お互いに理解し合った。視線が途中で交錯、内気な愛の思い切つての告白を伝える。不注意な母上は、家内がごたごたしているの、可愛い娘の心の門前に配置していた番兵をよりにもよつてまづい時期に撤収してしまつており、この重要な歩哨が配置されていなかったの、例の術策に富む密輸業者である愛神が、薄明かりに紛れて人知れずこっそり忍び入る機会を窺つていた。一度足場を占めたとなると、愛神は令嬢にママとは全然違う教育を施したもの。あらゆる礼法の公然の敵である彼が、従順な女弟子からまづ真つ先に取り除いたのは、最も甘美な情熱にあつても生まれと身分が顧慮されねばならない、そして恋人たちは整然たる一覽表に掲載され、昆虫採集標本のちいぢやな甲虫「若い綺麗な娘」という意味もある」と地中の虫けらみだいに、この表に従つて分類されるのだ、という先入主。冷たい血統自慢は彼女の心の中で、さながら快い日の光に大気を暖められた凍つた窓硝子の氷の奇怪な花蔓模様のごとく、急速に溶け去つた。エミリーエはいとしい男に家系図と叙爵書を免除、氏素性という古臭い特権は、こと恋愛に關しては、人間の自由に負わされた何とも耐え難い軛である、との意見を持つに至つたほど、政治的異端説を大いに推し進めた。

男前のフリッツは令嬢に恋い焦がれていた。そしてあらゆる状況から、戦の勲しに負けず劣らず雅の道の勲しにも恵まれているのに気づいたので、生じた最初の機会に、怯めず臆さず自分の思いの文を吐露するのを躊躇わなかつた。彼女はこの愛の告白に顔を赤らめて、けれども心嬉しく耳を傾け、かくして相思相愛の二人は変わらぬ信実を互いに誓い合つて一つに結ばれた。さて、彼らは今現在は幸せだったが、これからのことを考えると恐ろしさに震え慄くのだった。芳しき春が回帰して部隊は再び天幕生活に戻る事になつた。軍勢は集結し、恋人たちが別れ別れにならねばならない悲しい期日が迫つて来た。そこで、死以外の何物たりとも彼らを引き裂くことのないよう、愛の

絆を法に適った遣り方で有効にするにはどうしたらよいか、深刻な協議が行われた。令嬢は誓いを交わした相手に結婚問題についての母親の考え方をかねて打ち明けていたが、誇り高い奥方が大事に育んで来た計画について、愛の結婚のために、髪の一筋分でも譲歩するだろう、とは期待できなかった。

母夫人の計画を掘り崩そうと、百もの謀りごとが発案され、また全て投げ捨てられた。そのどれもこれもに、うまく成功するとは甚だ疑わしい、測り知れない困難さが飛び出すのだった。けれども若い軍人は愛するひとが、大願成就に至る道をどれか開拓しよう、と心を決めているのが分かっていたので、彼女に、恋が考え出した最も確実な策略である誘拐なつかしを提案した。これはもう恋の道では数え切れない回数、両親の構想を引っくり返し、彼らのかたくな我意を打ち破るのに成功を取めて来たし、今後もまだまだ繰り返すうまく行くことだろう。令嬢はちよつと思案して、同意した。あと工夫しなければならぬことはただ一つ。堅固に壁を廻らし、防塁で守られている城からエミールエがどうやって逃げ出し、待ち構えている略奪者の両腕の中に飛び込むかである。なにしろ彼女は、ヴァレンシユタインの駐屯部隊が進発し次第、母親なる哨兵はまた以前の配置に就き、自分の一挙手一投足を監視、目を離しつこないだろう、とちゃんと弁えていたから。しかし工夫に富む恋はあらゆる困難に打ち勝つ。古い言い伝えによれば、幽霊修道女が七年過ぎたので城中に姿を現す時が、次の秋の万霊節せうれいせつに迫っていることを彼女は知っていた。これが出るのを城の住人が皆怖がっていることも同じく承知だった。そこで、今度は自分が幽霊の役割を引き受け、尼僧の装束をひそかに準備しておき、こうした変装で逃亡する、という大胆な思いつきをしたのである。

男前のフリッツはこの良く考え抜かれた企てにうっとりし、嬉しがつて手を叩いた。三十年戦争時代には強韌きやうじんな精神せいしんが世に認められるのはまだ時期尚早だったが、若い勇士は充分しつかり者で幽霊の存在には疑いを差し挟んでいたし、あるいは、少なくともこうした怪力乱神をあれこれ穿鑿せんさくせずそつとしておくだけの心得はあった。取り決めが

一切済むと、彼はひらりと馬にまたがり、愛の庇護に身を委ね、指揮する騎兵中隊の先頭に立って出発した。あらゆる危険を物ともしなかつたが、戦役は彼にとっては無事に終わった。愛が彼の願いを聞き届け、その保護下に置いたかのように思われた。

かれこれするうち令嬢エミーリエは惧れと希望の狭間で暮らしていた。彼女は忠実なアマデイスの命を思つて戦慄し、冬営した客人たちの身が戦場でどうなつたか情報を集めるのに熱心に専念した。小競り合いの噂を聞くたびに驚いたり案じたり。これを母親は娘が優しく感じ易い心を持つてゐる証拠と解釈、悪く気を回したりしなかつた。軍人の方は、時々秘密の手紙——これらは忠義な腰元という経路によつて届けられた——を通じて、自分が遭遇したさまざまな巡り合わせについて自身としいひとにせつせと報告、同じ経路で彼女から音信を受けるのが常だつた。戦役が終了するとすぐさま彼は、かねてからの企てである遠征のために準備万端調べ、駆遣の旅のために四頭の黒馬と一台の狩猟用軽馬車を購入、約束の場所であるラウエンブルク城近くの小さな林苑に待機しなければならぬ日をうっかり間違えないよう熱心に暦を覗いたもの。

万靈節になると令嬢は、例の忠義な腰元に手助けしてもらつて計画を実行する支度をし、少し気分が悪いとの口実で早くに自室に引き上げ、そこでこれまで地上に出現したうちで最も可愛らしい騷靈に姿を変えた。宵の数時間はゆつくりと経過、エミーリエにはひどくのろのろとしてゐるよう感じられた。時時刻刻、冒険をやつてのけたい、という気持ち膨れ上がる。そうこうするうち恋人たちの寡黙なお友だちであるきらめく月がその薄黄色い光でラウエンシュタイン城を照らした。城中はせわしない昼間の物音が次第に消えて深閑と静まりかえつた。城中で起きてゐるのは、夜更けなのにまだ厨房の経費を計算して七面倒な数字と取り組んでゐる女中頭、ご主人様の朝食のため半シヨック「三十羽」の雲雀の羽を筆らなきやならない家禽調理人、同時に夜警の仕事も引き受けて刻を大声で告げる



門番、それからわおうんと吠えて昇って行く月にご挨拶
 申し上げている目敏い番犬のヘクトルだけ。

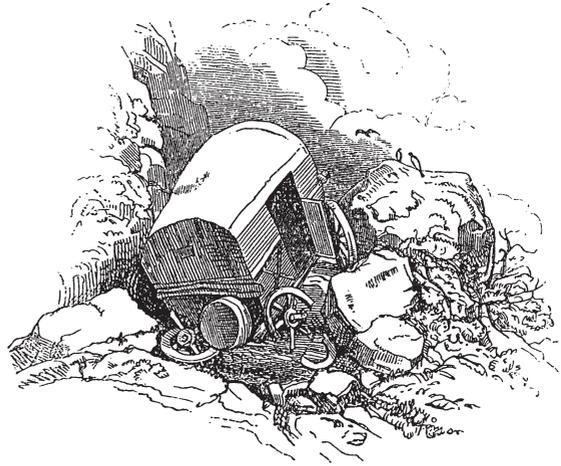
真夜中の鐘が響くと、大胆なエミリーエは出発した。
 彼女は全ての扉を開く鍵をかねて手に入れておいた。足
 音を忍ばせて階段を下り、回廊を抜けて行くと、厨房に
 まだ灯りがついているのに気がついた。そこで彼女は鍵
 束を力一杯じゃらじゃらと鳴らし、全ての暖炉の焚き口
 の蓋を大音響を立てて閉め、館の扉と城門の脇の潜り戸
 を何の支障も無くすらすらと開けた。と言うのは、城中
 で起きていた例の四人の住人は異様な騒音を耳にするな
 り、騒ぎ屋の尼さんがやって来た、と勘違いしたのであ
 る。びっくり仰天して、鳥の羽を筆っていた男は台所の

戸棚に、女中頭は寢床に、犬は犬小屋に、門番は妻が寝ている藁の山の中に、それぞれ飛び込んだ次第。野外に出た
 令嬢は林目指して急いだ。そこに駿馬に繋がれた馬車が止まって自分待っているのもう遠くから見える、と彼女
 は思い込んだ。ところが近づくとそのそれは人惑わしの木木の影に過ぎなかった。彼女は、自分がこの幻影に騙されて落
 ち合う場所を間違えた、と考え、林苑の全ての路を端から端までくまなく歩き回った。けれど彼女の騎士もその馬車
 もどこにも見当たらなかった。このできごとに度を失った令嬢は、これをどう解釈したらよいのかさっぱり分からな
 かった。約束した逢い引きに姿を現さないというのは、恋人同士にあつては既にもう是認し難い犯罪である。が、今

回のような場合に居合わせないのは、恋愛道では大逆罪以上。エミーリエは一時間ほど待ちぼうけを喰わされ、悪寒と不安に胸を震え慄かせた挙句、いたましく泣き、かきくどき始めた。「ああ、あの不実者はあつかましくも私を物笑いにしているんだわ。あのひとはどこかの娼婦の腕に捉まって、そこから逃げられないで、私の誠実な愛情の事など忘れてしまっているんだわ」。こう考えた彼女は忘れていた家系図をふと思い出し、氏も無く、高尚な感性も持たない男を愛するほどひどく身を貶めたことを恥じた。目くるめく情熱に去られたその瞬間、しでかした失錯を償うために理性に相談した彼女に、この実直な忠告者は、再び城に引き返し、それから信義を破った男など忘れてしまいなさい、と言った。彼女は最初の方はただちに実行、安全かつ無事に寝室に辿り着いた。彼女に全てを打ち明けた取り掛かつてはみたものの、ゆるゆるとで、それも再考また再考。

さはさりながら氏の無い男には、かんかんのエミーリエが思っているような罪があつたわけではない。彼は過たず時間通りにやって来ていたのだ。胸が歓喜で一杯の彼は可愛い恋の戦利品を受け取るのが待ちきれずにじりじりした。真夜中が近づくと彼は、城の傍に忍び寄り、潜り戸が開くのをじつと窺っていた。思つたより早くいとし修道女姿がそこから出て来た。潜伏場所から彼女を迎えに飛び出した彼は、真心籠





の村へと運ばれた。

何もかも失くなった。例の四頭の黒馬は頭をおっしょっていった。しかしこうした損失は彼にはろくすっぽ気にならぬ。ただいとしいエミリーエの運命を思いやって、居ても立ってもいられず、人人を全ての街道に派遣、彼女の消息を求めた。けれども彼女について分かったことは皆目。彼が当惑から覚めたのは漸く真夜中のこと。鐘が十二鳴ると、扉が開いて、失踪した駆け落ち相手が入って来たのである。でも、魅力溢れるエミリーエの姿ではなく、おぞま

めて相手を抱き締め、こう言った。「君が手に入った、君を掴まえた、二度と君を放さない。すてきな可愛いひと、君はほくのもの、すてきな可愛いひと、ほくは君のもの、君はほくんだ、ほくは君んだ、体も心もね」。フリッツが喜び勇んで魅惑の荷物を馬車に運び入れると、馬車は猛烈な勢いでまっしぐらに山坂を上ったり下ったり進んで行った。馬たちは鼻息荒く、息を弾ませ、鬣たがみを振り、興奮して、もはや馬銜はなみに従おうとしなかった。車輪が一つ外れ、ひどい衝撃に御者は野原にぱっと投げ出され、切り立った断崖を越えて馬も馬車も一切合財、奈落の底へ円筒のように転がり込んだ。恋する主人公は我が身に何が起こったのやら五里霧中、体中小突き回され、頭はぶっ叩かれ、激しい転落に意識を全く失った。再び正気に返った彼はいとしい駆け落ち相手が傍にいないのに気付いた。夜の残りをこうした危なっかしい状態で過ごした彼は、朝になって彼を発見した数人の農夫たちに最寄り



しい骸骨の幽霊尼僧の姿で。男前のフリッツは自分が間違ったのを引き当ててしまったことに気づいて驚愕し、瀕死の冷や汗を流し、十字を切り、呪文で祓い、恐怖のうちで思いついた危急の時に唱えるありとあらゆる短いご祈禱を唱え始めた。修道女はそんなことはろくすっぽ気にも留めず、寝台の彼に歩み寄り、氷のように冷たい乾溷びた手で彼の火照っている両の頬を撫でて曰く。「フリーデル、フリーデル、おとなしゅうしやれ、わらわはそなたのもの、

そなたはわらわのもの、体も心ものう」。彼女は時計で計って一時間ほどかようなお出ましで彼を責め苛み、それからまた消え失せた。それからというもの、彼女はこうした非肉体的恋愛遊戯を毎晩行い、彼が宿営しているアイヒスフェルト(35)まで随いて来た。

ここでもフリッツは一向安息を得られなかった。幽霊の色事のために苦しみ悲しみ、氣力を悉たくはく失ったので、連隊の士官たちはだれもかれも彼の深い憂愁を見て取り、実直な兵士たちは皆彼に同情を寄せた。この勇敢な仲間がどんな問題を抱えているのか、だれにも謎だった。なぜなら彼は、不幸な秘密が周囲に知れ渡るのを憚ったからである。しかし男前のフリッツには朋輩たちの中に一人の信頼の置ける親友がいた。これは年老いた騎兵曹長心得で、シュレプファー(36)のあらゆる術に通じた名人だ、との評判だったし、噂によれば、金剛不壊(37)の体になる失

われた秘法を心得ていて、精霊たちを呼び出すことができ、そして毎日自在フリーウィールの射撃⑧をしている、とのこと。この世故に長けた兵士は愛情の籠もった容赦なさで友人に、彼を悩ましている内緒の苦悩を打ち明けるよう迫った。呵責に遭っている恋の殉教者は生きるのに倦み疲れていたもので、他には決して洩らさないよう固い約束の下、とうとう悔せざるを得なくなつた。「兄弟、それだけのことかね」と祓魔師は微笑みながら言った。「こんな拷問からはすぐに解放して進ぜる。わしに随いてわしの宿舍まで来なされ」。不可思議な準備がたくさん執り行われ、円や記号がどつさり地面に描かれ、魔術師の召喚に応じて、魔法のランプのぼんやりした光だけが照明の暗い部屋の中に真夜中の幽霊が今回は真昼間に出現、犯した乱暴狼藉をこっぴどく叱責され、ある人里離れた谷間にある中がうつろな川柳かわやなぎ居所として与えられ、即刻この流刑地バトムスに赴くように、と指示された。

亡霊は消え失せた。けれどもその瞬間嵐と言おうか旋風つむじかぜと言おうか一陣の狂風が巻き起こり、町中が仰天した。大風が吹き荒ぶとそのたびに、十二人の選り出された市民が即座に蔽かな騎馬行列を作つて通り通りを練り歩き、馬上で懺悔聖歌を詠唱、風の退散を祈念するのが、この土地の敬虔な慣わしだった(3)。十二人の乗馬長靴を履いた馬術上手の使徒たちが、颯風アポステルを鎮めるために街頭に派遣されると、轟轟と吼え猛つていた風音はぴたりと止み、亡霊は二度と姿を現さなかつた。

勇敢な軍人は、この妖異まじかしごとが自分の哀れな魂を目標にしたのだ、とよく分かつていたので、呵責アラーケイスト霊がいなくなつてくれたことを心から喜んだ。彼は人に恐れられるヴァレンシユタイン帽ヴァレンシユタインを被り、再び元氣一杯遠いボンメルラントへ出征した。そこで、魅惑のエミリーエの消息に接することなく、三度の戦役に従事、天晴れ見事にふるまつたので、ポヘミアへ引き上げる折には連隊を率いる身分になつていた。彼はフォークトラントを通る道を取つたが、彼方にラウエンシユタイン城を望むと、いとしい女むすめも自分に操を立ててくれているか、と不安と猜疑さいぎに心臓がどきど



きました。以前親しくして戴いた一家の友人、とだけの口上おとこなで訪うと、それ以上詳しく名乗らなかつたのに、客人権の慣わしに従い、たちどころに招じ入れられた。ああ、不実者だとはつきり思い込んでいた男前のフリッツが部屋

に入つて来た時、エミーリエはどんなに驚いたことか。彼女の優しい心は嬉しさと腹立ちに襲われ、親しげな視線を彼に向けてやる決心が付かなかつた。もつとも美しい双眸そうぼうとこのように同盟するには非常な自制を必要としたのだったが。彼女は三年以上もの間、不誠実と考えていた氏の無い恋人を忘れ去ろうとするにせよしないにせよ、自分自身を相手に頻頻と相談に耽つていたのであり、それゆえにこそ寸刻たりとも相手を忘れたことは無かつたのだ。彼の面影はしよちゆうまつかい目交に揺曳し、とりわけ夢の神が彼の有力な庇護者であるように思われた。なにしろ、フリッツが去つてからというものは、令嬢が見た無数の彼の夢は、まさしく彼を弁護する、あるいは、庇つてやることをもくろんでいるかのようなつたから。

颯爽たる連隊長中尉は、その尊敬すべき官職が母夫人の厳しい監視をいくらか和らげたので、間もなく人交ぜせずいといしいエミーリエの取り繕つた冷淡さを吟味する機会を見つけた。彼は誘拐行のあのおぞましい椿事を打ち明け、彼女の方

は、フリッツが信実の誓いを破った、と疑つてとても切なかつたことを率直に告白した。相愛の二人は、自分たちの秘密を知る範囲をいくらか拡げ、ママを内事あつかに与る狭い内輪に引き込むことに合意した。

善良な奥方は狡賢いエミリーエの秘めたる情事を聞かされて仰天、また、誘拐計画の事実再構成を告げられて、これまた同じくひどく驚いた。彼女は、愛がこうした苛酷な試練に報いてくれたのをもつともだ、と納得。ただ、氏の無い男であることがおもしろくない。けれども令嬢に、男の無い氏と結婚するより、氏の無い男と結婚する方が遙かに賢明である、と諭されると、こうした論拠に何も故障を申し立てることができず、母親としての同意を与えた。なぜなら、どこぞの伯爵がその胸に候補として潜んでいたわけではなかつたし、当事者たちの間では秘密条約によつてもうかなり話が進んでいるようだったから。男前のフリッツは魅惑いいなずけの許嫁を抱き締め、幽霊尼僧に異議を申し立てられることなく、無事平穩に婚礼を挙げた。

原注

- (1) ラウエンシュタイン Lauenstein¹³ この名が付いている土地はいくつかある。たとえば、エルツゲビルゲ地方のある古城と小さな町、ニードケルンテンのある小さい町、ハノーファーのある山城と村が挙げられる。おそらくまだ他にもあろう。
- (2) フランツ・フィナツイ Franz Hinze. 食べる心配について悩んだことのないこの紳士は、生年五十六歳で正味四八八ポンド〔英国ポンドなら約二〇キロ。現代のドイツポンドなら二四四キロ〕あった。
- (3) 大風が吹くとそのたびに……この土地の敬虔な慣わしだった この風退散の騎馬行列は前述の都市では今日まで続いている。

訳注

- (1) フォークトランド Vogtland. ザクセン地方南東部の山岳地帯。
- (2) ロックヴィッツ Lockwitz. 同名の村がザクセンにある。ドレーステンの近く。

- (3) フス派戦争 ポヘミア王国の説教師であり、首都ブラハ(ドイツ語ブラーク)のカレル大学総長の要職にもあった宗教改革者ヤン・フス(一三六九—一四一五)は、カトリック教会のさまざまな墮落を指摘、重罪を犯している宗教界、俗界の首長は統治権を失うべきだ、と説いた。これは民族意識を高めていたチェコ人に大きな反響を呼んだ。ポヘミア王国の高位聖職者はほとんどドイツ人だったからである。フスは一四一五年コンスタントツの公会議で審問を受け、異端と判決され、火刑に処された。しかしフスの教えを信奉する人人、すなわちフス派は、カトリックの支配階層と戦い始める。これをフス派戦争と称する。一四一九年—一四三六年。
- (4) オルラミュンダ伯爵 Graf von Oranunda. オルラミュンデOranundeはオスターラントとテューリンゲンの伯爵家。
- (5) 郷土 ムゼーウスはここでは、英国の紳士階級のように、世襲貴族や一代貴族では無いが広大な土地を持つ有産者の称号として用いている。なお、「リブツサ」、「宝物探し」の訳注参照。
- (6) 回廊 修道院の中庭を囲む回廊。
- (7) 悪魔 *Beid*. 悪魔の名。新約聖書コリント後書十六章十五節。ヘブライ語で「墮落」「下劣」の意。
- (8) お聖水 カトリック教で司祭により祝別された水。
- (9) 灌水器 聖水を振り掛けるための道具。
- (10) ガスナー *Gahner*. ムゼーウスの同時代人で評判の高かった悪魔祓い師ヨハン・ヨーゼフ・ガスナー(一七二七—一七七九)を指す。彼は、悪魔を祓い清めることにより病人を癒すことができる、と称した。一七七四年レーゲンスブルクの司教フッガーにエルヴァンゲンとレーゲンスブルクに呼ばれた彼の許へ、ポヘミア、オーストリア、バイエルンからなんとも名状し難い数の群集が押し寄せたので、遂に一七七七年神聖ローマ帝国皇帝ヨーゼフ二世はこの騒動を抑止し、ガスナーにレーゲンスブルクを立ち去るよう命じた。
- (11) コーポルト *Kobold*. 特定の家に棲みついて、僅かな食べ物と引き換えに家の仕事をなにくれとなくしてくれるが、待遇が良くないとひどい悪戯をして仕返しをする家の精。もともと、奉仕はしないで悪戯だけに専念するあまり性質のよろしくない連中もいる。「リューベツァールの物語」訳注参照。
- (12) 三十年戦争 ドイツを主戦場として三十年間(一六一八—一六四八)荒れ狂った内戦。もともとイスパニア、オランダ(ネーデルラント諸州)、スウェーデン、フランスなど外国軍も介入したので、ヨーロッパ戦争という性格も帯びた。詳しくは「リューベツァールの物語」訳注参照。
- (13) プレスブルク *Preshburg*. 現代のスロヴァキア共和国の首都ブラティスラヴァ。ドナウ河畔の由緒ある古都。この物語が書かれた当時はオーストリア＝ハンガリア二重帝国＝王国の重要都市。
- (14) ツォル 長さの単位。インチに相当。「リブツサ」にも出る。肥満度なら重さで測るのが当然と考えられるかも知れないが、突き出た腹の頂点とその対極の背中の部分の間隔を横から測る、というやりかたもある。

- (15) ロイス家 Reußen. テューリンゲン東部の古い名門で、ドイツの最高の侯家。神聖ローマ帝国皇帝ハインリヒ四世(在位一〇八四—一〇一五)によって一〇九九年ゲラ周辺の帝国領代官に任じられたグライスベルクのハインリヒ敬虔侯を祖とする。
- (16) あんよはお上手を習う紐リボン。「泉の水の精」訳注参照。「リップッサ」にも出る。
- (17) 公爵グロフ。ここでは神聖ローマ帝国を形成する諸領邦のうち王国以下のしかるべき小国の君主を指す。諸侯。
- (18) 親衛騎士リッペン。ここでは貴婦人に扈從し、愛を捧げる騎士。詳しくは「三姉妹物語」訳注を参照のこと。
- (19) 典雅の女神 Grazie。ローマ神話の典雅の女神たちグラティアエの単数形。「三姉妹物語」、「ローラントの従士たち」、「屈背のウルリヒ」にも出る。
- (20) ドイツ民族の神聖ローマ帝国 das Heilige Römische Reich deutscher Nation。「屈背のウルリヒ」訳注参照。
- (21) ヴァレンシユタイン Walenstein。アルブレヒト・ヴェンツェル・フォン・ヴァレンシユタイン(一五八三—一六三四)。三十年戦争で活躍した神聖ローマ帝国軍の将軍。常勝將軍の名をほしいままにした。帝国軍総司令官に昇る。ポヘミア王国の新教徒貴族の子に生まれたが、カトリック教に改宗。自費で数万の傭兵隊を組織することができた。この物語の軍勢も士官から兵卒まで傭兵である。なお「リュートツァールの物語」訳注をも参照のこと。
- (22) これらの軍神たちの中には……若い英雄も少なくなかった。ギリシア神話の軍神アレスは足奏えの鍛冶の神ヘパイストスの妻アプロディーテに密通した間男で、ヘパイストスに現場を押さえられて、大恥をかかされる、とホメロスでは説かれている。これをそのままローマ神話の神名に置き換えれば、軍神はマルス、ヘパイストスはウルカヌス、アプロディーテはウエヌスとなる。しかし、ギリシア人に較べ軍事を尊んだローマ人は、マルスをそのような道化役にはしていない。なお、ここでは、太っちょの郷土殿とその奥方を暗示している。
- (23) カリオストロ伯爵 Graf von Cagliostro。自称カリオストロ伯爵アレックスサンドロ(一七四三—一七九五)。本名ジュゼッペ・バルサモ。十八世紀の冒険的山師の一人。詳しくは「屈背のウルリヒ」訳注参照。
- (24) マルタ騎士団 十字軍に支配されていたエルサレムで巡礼者の救護のために一〇七〇年結成された修道会は後聖ヨハネ騎士団に発展したが、シリアの大部分およびエジプトを支配したアイユーブ朝の王サラフ・アッディーン(サラディン)に一八七七年エルサレムを征服されると、キプロス島を経てロードス島に本拠を移転し、対トルコ帝国戦に従事した。しかし、ソレイマン二世に破れ、一五二二年ロードス島からも撤退せざるを得なくなった。神聖ローマ帝国皇帝カール五世は一五三〇年騎士団にマルタとその属島およびトリポリを与えた。騎士団のマルタ島支配は一七九八年ナポレオン・ボナパルトによって島を占領されるまで続く。
- (25) ロシア皇太子 原文は Zarewitsch となっている。Zarewitsch の訳記か。「ツァーレヴィッチ」は本来ロシア皇帝の子息たちの称号。山師カリオストロが活躍していた頃のロシア皇太子は暗愚なパーヴェル大公。弟はいない。しかし男女関係に奔放だった女帝エカチエリーナ二世が

母親だから、このような噂も立ち易かったであろう。

(26) アルバニア公 Prinz von Albanien. アルバニアは一四七九年以降この時代までトルコ帝国領。公国ではない。

(27) 卒伍から身を起して騎兵中隊長にまでなった 直訳すると、「長槍（中世末期の歩兵の武器）から騎兵中隊長まで立身した」となる。中世の傭兵部隊では、長槍や弩ないし火繩銃を操作する歩兵は、騎兵より一段下に見られたし、その騎兵の一個中隊を指揮する士官となれば、普通は貴族出身者が任命される誉れ高い地位である。近代では中隊長は陸軍大尉が相当官。

(28) 掘り崩そう 城や要塞を攻略する場合、防護壁の下まで坑道を掘り進め、火薬を仕掛けて爆発させ、下から崩す方法がある。ムゼーウスは軍事用語を用いているわけ。

(29) 万霊節 カトリック教で、教えを奉じて死んだ死者の日。十一月二日。

(30) 強靱な精神 Starkschädel. 利欲や煩惱に墮射されず、もろもろの先人觀と闘うのも辞さない強い精神の持ち主の性格・行動。妖怪変化などの俗信も受け付けないわけ。「リューベツァールの物語」（ここでは殊更注は付けなかった）、「愛の信実」にも出る。

(31) アマデイス Amadis. アマデイス・デ・ガウーラ。中世の散文騎士物語の主人公。詳しくは「屈背のウルリヒ」訳注を参照のこと。

(32) 騷 Poltergeist. 家具類、食器類を投げたり、家鳴り震動させたり、極めて騒がしい精霊。一般には姿は見せない。詳しくは「泉の水の精」訳注参照。

(33) 雲雀 Lerche. ヨーロッパにおいて雲雀は、小禽類の中でも特殊で、食用にされるばかりか、狩猟の対象にもなっている。現代では地面に設置される罟や、大きな霞網の使用は法律で禁止されているが、狩猟自体は許されている。ローマ人は既に炙って詰め物をした雲雀を賞味していた。十七世紀にはライプツィヒの雲雀の評判は確定していた。この地方には豊かな穀物畑が広がっていたので、雲雀は上質でたっぷりした餌を摂ることができたからである。雲雀のバテや雲雀の煮凝りは近世の發明。このように雲雀は鵝、鶉、鶩などとともによりヨーロッパの美食家が好む小鳥なのである。

(34) 家禽調理人 原文「去勢鶏の詰め物師 Kapauenstopfer」。去勢雄鶏は柔らかくて美味かつ肥大しているので好まれる。また、鶏の丸炙きの場合、腹腔に詰め物をすることもよくある。

(35) アイヒスフェルト Eichsfeld. ザクセン地方とハノーファー地方の間に広がる標高四〇〇—四五〇メートル、領域一五〇〇平方キロの高原。住民は圧倒的にカトリック教徒。五三〇年フランク王国の支配下に入り、次いでマインツの大司教領に属した。しかし、町の名ではない。中部フランクケンの都市アイヒシュテット Eichstätt の誤りか。ここは神聖ローマ帝国直屬都市であり、住民はおおむねカトリック教徒だから、神聖ローマ帝国軍であるヴァレンシュタインの同勢が宿營するには適している。

(36) シュレプファー Schöpfer. フランクフルトとライプツィヒでコーヒエ店を経営していたシュレプファーという男（一七七四年死去）は、心

霊術によって精霊界と繋がりがある、と自称していた。ムゼーウスは時代錯誤を承知で遊んでいるのであろう。

(37) 金剛不壊の体になる 中世の民間信仰では、特定の魔法によって「金剛不壊の体になる」、すなわち、矢や弾丸、剣や槍に傷つけられない体になることができる、とされた。

(38) 自在弾 魔弾とも訳される。撃てば必ず的に命中する弾丸。カール・マリーア・フォン・ヴェーバー（一七八六—一八二六）の歌劇「魔弾の射手」は有名。

(39) 川柳 Bachweide: 川辺に生えている柳。

(40) 流刑地 Pahnus: 「姉妹物語」訳注参照。

(41) ヴァレンシユタイン帽 羽飾りの付いた鍔広帽子。

(42) ポンメルラント Pommerland: 北ドイツのボンメルン地方。三十年戦争では、バルト海の覇権を我が物に、と望むスウェーデン国王グスタヴ・アドルフ、デンマーク国王クリスティアン四世が侵攻した。

(43) 連隊長 近代では陸軍大佐が相当官。フリッツは三年間で（現代風によれば）大尉から、少佐、中佐、大佐と三階級も昇った、と考ええると、その栄進ぶりがはっきり分かる。一個の傭兵隊にあつては最高の地位である。また、傭兵隊の連隊は現代の連隊より遙かに人数が多かった。

(44) 事実再構成 species facti: ラテン語。法律事件における事実経過の再構成。

(45) 異議を申し立てられる 婚礼に先立ち教区の教会で聖職者が、しかしかの男女がいついつに結婚する予定である旨、会衆に公示する。異議がある者は指定期限までに申し出る。申し出が無ければ、無事に挙式ができる。

(46) ラウエンシユタイン Launstein: 同名の町でザクセンにあるのは海拔五九六メートルの高みにある保養地である。ごく小さい。同名の城もある。ただしボヘミアから移って来たドイツ騎士団によって建てられた。既に一二八九年に名が文書に挙げられている。一四〇二年ドーナの伯爵家から町とともにヴェッティン家（ザクセン王室を初めとしてザクセン・ヴァイマル大公家など数数の名家がこの家系）に帰属。

解題

この逸話の主題の一つは「死人の愛」である。

訳の底本の注釈者ノルバート・ミラーは、ムゼーウスはこの逸話の素材に、生きている妻の姿になったある幽霊に

行く先先至るところ付き纏われた、コーブルク公爵の主馬頭しゅまのかみの伝説（エラスムス・フランツィスクスフが一六八五年著した『地獄のプロテウス』の中で物語られている）と、ビュルガー（二七四七—一七九四）の名高い物語詩「レノーレ」（二七七三）Gottfried August Bürger: *Lenore* を結び付けたのかも知れない、と記している。発表されると、ヨーロッパの文壇に大きな反響を呼んだ「レノーレ」の粗筋はこうである。

乙女レノーレが、やがて夫婦めおとに、と行く末を固く誓った恋人ヴィルヘルムは、プロイセン軍の一員としてオーストリア軍とボヘミアの首都プラーク（チエコ語プラハ）で戦っている。やがて長い戦も終わり、軍は帰還したが、その隊列にヴィルヘルムの姿は見当たらない。レノーレは、恋人が死んだ、と思い、絶望して神を呪う。やがて日が暮れ、月の照る夜となる。馬の蹄の音がして、門扉の叩き音が鳴る。「いとしいひと、眠ってるの、起きてるの」。懐かしいヴィルヘルムの声。狂喜したレノーレは「起きてます、そして泣いてるの」と答え、更に恋人に、どこから来たの、と訊く。恋人は、ボヘミアから旅をして来た、それも真夜中だけ、これから君を結婚の新床に連れて行くのだ、と言う。男の黒馬の鞍のうしろに乗った乙女は、月光の中、疾風のように旅をする。目的地は遠くの静かで冷たくて小さい場所。到着したのは墓場で、ある墓の傍で馬は止まる。ヴィルヘルムの衣装はずれ落ち、露わになった姿は大鎌と砂時計を持つ骸骨、つまり「死」（死神）だった。馬は棹立ちになり、地下に沈み、レノーレは黄泉路よみじへと赴く。

従って、これからムゼーウスが主題を借り受けた、とするのはいささか牽強附会が過ぎよう。「レノーレ」は「幽霊花婿」譚なのだから。「幽霊花嫁」型、あるいは「吸血鬼花嫁」型なら、ゲーテ（一七四九—一八三二）の物語詩「コリントの花嫁」（一七九七）Johann Wolfgang von Goethe: *Die Braut von Korinth* がある。ただしこれはムゼー

ウスの物語より後に出版された。

もう一つの主題は幽霊譚だが、これはドイツでも枚挙に^{いと}違無^いいから、ムゼーウスの素材をこれこれと特定するのは難しい。

なお、三十年戦争時代の傭兵隊についての描写をムゼーウスがその時代に生きた作家グリンメルスハウゼン（二六二一／二二一一六七六）の『阿呆物語』（『ジンプリツイスイスムスの冒険』。一六六八／六九）Hans Jacob Christoffel von Grimmelshausen: *Der abenteuerliche Simplicissimus* から借りた可能性は大きい。

(1) エラスムス・フランツィスキウス Erasmus Franciskus 未詳。

(2) 『地獄のプロテウス』 Der höllische Proteus. 未詳。